

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

### 第2章 地域格差 ②

(①から続く)

#### 3) 患者の知識格差

専門病院へ入院している患者と、地方の病院に入院している患者の差をくらべてみる。

てみよう。

専門病院に入院する患者は自分の病状を良く知って

いる患者が大半を占め、病

院、医師を狙い撃ちして、

## 告知が死を招くことも

入院、治療にあたっている。

必死に生きようと工夫している様子が読み取れる。

一方、地方の患者はそこに病院があるから入院して、自分の治療を医師にま

る投げしている患者が多い。

自分自身の病状を知らずに、どのような治療をされて居るかも知らない患者がほとんどだ。なんとその差は大きい。

#### 4) 告知の格差

がん専門病院で告知を受けると何の躊躇もなく、自分の状況を正確に伝えてくれる。それ自体は有難いことだ。

しかし、地方の総合病院ではいろいろな病状の患者が入院しているので告知の仕方は慎重となる。むしろダレいな告知が多い。

そこで問題なのが、地方の患者が都会のがん専門病院で告知を受ける場合だ。躊躇なく告知することの危険さだ。

あるサロンであったケースだ。

サロンへ新しい20代の女性患者が来た時だった。自分の病状に不安を感じている患者だった。もっと良く知りたいと発言した。サロンのみんなは、だったら、東京築地のがんセンターでセカンド・オピニオンを受けたらどうか?と助言した。

私も同感だった。彼女はすぐに東京へ向かった。ひとり。

そして、セカンド・オピニオン終了後、山手線の列車に飛び込んだ。サロンのメンバーの衝撃は凄かった。

た。

#### 5) 生きる力の格差

いろいろな患者がいる。少しでも長生きしたいと思ひ、必死に治療に向き合っている患者。

一方、自分はがんになっ

てしまったからもう長くは生きられない。

どうでもいいや!と投げやりになってしまう患者。

その差は予想以上に大きい。

あなたは どのタイプだろうか?